

明治・大正期における副詞「きっと」の使用量の変化について 吉本裕史

本発表は、副詞「きっと」の使用傾向の変遷過程とその背景を考察することを目的に、明治・大正期の用例を調査するものである。現代語の副詞「きっと」は、主に推量の用法で使用される（吉本裕史(2020)「現代語の副詞「きっと」の記述的研究」『名古屋大学人文学フォーラム』3）。しかし、近世後期では「きっと」の使用は推量の用法に偏らない。また、話し手が直接認識した事態（以下、認識事態）が確実に真であることを表す例が推量の用法と同時期に見られる。

山西正子(2010)「「きっと」考」『目白大学人文学研究』6は、明治期の用例と現代語の用例の比較から、「きっと」使用の判断の基準が、「確認」から「確信」へ移行している可能性を指摘する。つまり、認識事態に対し用いられる用法の使用量が減少し、未認識事態に対し推量する用法の使用量が増加するという、「きっと」の使用傾向の変化が指摘されている。しかし、その変化の過程および背景は、山西(2010)を含め従来の研究では考察されていない。

本発表では、明治・大正期の用例調査から、推量の用法の使用量が増加する一方で、認識事態に対し用いられる「きっと」の使用量が減少していく過程を明らかにした。また、認識事態に対し用いられる「きっと」と推量の用法（未認識事態に対し用いられる「きっと」）は、断定形との共起例が多いという点において共通する事実を指摘した。

そして、「きっと」の使用傾向の変化が起きた背景について、認識事態に対し用いられた「きっと」が、断定形と共起する構文条件を維持したまま、推量の用法として解釈されたとの仮説を立てる。すなわち、「きっと」の用法の使用量が推量の用法へと偏っていくのは、話し手が認識事態に対し用いた「きっと」を、聞き手が推量の用法として理解したことが背景にあるとする仮説である。この仮説は、現代においても「きっと」と断定形の共起例が最多である事実と矛盾しない。また、現代語において指摘される「きっと」の推量の特徴とも整合的である。